

夢の跡、北京「鳥の巣」は今

清華大学 野村総研中国研究センター副センター長
松野 豊

上海でついに万国博覧会が幕を開けた。日本のテレビも連日報道し、この大都市にスポーツが当たっている。しかしつい2年前、日本のメディアはこぞつて北京を取り上げていた。

上海万博を見ていて強く感じるのは、この国家イベントが終わった後のことだ。ちよつと思ひ出していた巨額を投じて北京という都市が大改造された。もちろん地下鉄や道路、空港などは、その後の北京市民に大きな利便をもたらした。しかし、あの巨大な施設群はその後、どうなったのだろうか？ 斬新なデザインで一世を風靡した国家体育場、通称「鳥の巣」。いったいどう使われているのか？

まず「観光地」にして生計を立てようとした。入場料を支払って見学できるようにになっており、五輪終了直後の1年間では延べ1200万人が訪れたという。筆者も入ってみたが、中では特に展示やイベントもな

く、フィールドにはゴムマットが敷き詰められていた。あの日の熱気に思いを馳せるだけだった。

鳥の巣の年間維持費は約21億円で、五輪終了後は民間に30年もの長期で運営を委託する体制を敷いていた。

しかし、観光客収入も減り始め、維持費すらカバーできなくなつたためか、09年8月には再び北京市傘下の会社に経営権が戻されてしまった。

また、鳥の巣は命名権販売が予定されていたが突然中止になり、その後は「ショッピングセンター」や「プロサッカーチームの本拠地」など、いろいろな計画が浮かんでは消えた。その間、香港スターのコンサート、イタリアのサッカーチームの試合、有名歌劇の上演などが行われ、最近では屋内スキー場としても使われた。「有名学校の運動会が行われた」という噂まで出ている。地元北京の新聞などは、鳥の巣の運営方法が迷走していることについて総じて批判的だ。

今後の大きな方針としては、総合

的な国際スポーツ文化センターとして活用し、ショッピング街やホテル、レストラン、スポーツ用品店なども誘致していくという。しかし、これだと既存の商業施設と何も変わるところがなく、むしろ維持費が高く採算が取りにくい施設になることは目に見えている。

日本の国立競技場や国立代々木競技場・体育館は東京五輪の後、スポーツイベントなどに幅広く使われたが、中国ではスポーツが産業として成り立つ基盤がまだないのかもしれない。国家が力を入れて建設したところが仇となり、高価な施設になつてしまひ、せつかく五輪で盛り上げたスポーツの発展に利用できない、という皮肉な現象が起きてしまつている。

国家の威信を懸けて開催し成功させた北京五輪。その象徴だった鳥の巣は今「夢の跡」でもがいている。上海万博も秋には終わる。この跡地こそは、ちゃんと地域に溶け込むような施設にしてほしい。